淡路花博25周年記念花みどりフェア第1回企画委員会　議事録

１　**日時**　令和５年11月29日（水）10:00～12:00

２　**場所**　兵庫県民会館10階「福」

３　**委員総数及び出席委員数**

委員総数　　11名

出席委員数　９名

４　**出席委員の氏名**

中瀬勲、入谷芳郎、門野隆弘、高木俊光、田中まこ、田辺眞人、原口晴美、堀内照美、三井雄一郎

（参考：欠席委員　古田菜穂子、光成麻美）

５　**検討議題**

（１）淡路島を取り巻く環境の変化とフェアの方向性について

（２）開催理念について

（３）開催テーマについて

（４）展示行催事計画の基本的な考え方について

（５）広報計画の基本的な考え方について

（６）協賛・収益の基本的な考え方について

６　**議事の概要**

事務局より、淡路花博25周年記念事業実行委員会委員長の指名により中瀬委員が委員長に決定したことが報告された。

議事について、事務局より資料1、2に基づいて説明を行った後審議を行った。委員の主な意見は以下のとおり。

【検討議題1、2、3】（資料2/P1～P7）

（中瀬委員長）

この25年で世の中はものすごく変わった。ただいっぱい植えられた美しいチューリップだけを見て喜んでいたのは過去の話で、世界的には、生物多様性や温暖化等、要は環境と経済と花みどりをどう考えていくかという時代になっている。今回を契機に、日本でも生物多様性、地球温暖化、人々の暮らしといったことをしっかり考え、最後のフェアとして総まとめができれば嬉しい。

（入谷委員）

世界の最先端も大事だが、花緑の持つ集客力を今一度見直すということも必要かと思っている。4年前に広島の都市緑化フェアを視察した際、コロナ禍のためほとんど開催されなかったものの、多くの若者が一生懸命作業をしており、自身が職業人として造園に没頭していた頃を思い出した。このフェアも、そういった伝統を継承し、新たな担い手を育成するような機会にもしていただきたい。

（門野委員）

生物多様性を守るといったことに加えて、生活環境の快適さをつくっていくということも重要だと考える。その会場で終わる単発のイベントではなく、理念を全国に広げ、人々の生活を快適にしていくようなきっかけにできればと期待している。

（堀内委員）

イベントから始まったことが、地域に広がり継続していく形になればと思っている。継承という点では、子供や学生が色んな形で参加できるような場面があればよいと考える。

（原口委員）

この25年で生産者は増えることなく減り続けている。資材が高騰する一方で値段は上がらないことが、農業従事者が増えない決定的な問題だと感じている。花卉産業も他人事ではなく苦労しており、日々の生産や出荷等で精一杯な中でこのフェアにどう協力していけばよいのか、皆で考えているところである。

（中瀬委員長）

昨日、ホームセンターへ行くと、勿忘草やゼラニウムの仲間が売り切れていた一方、パンジーやビオラが残っていた。一般の方の園芸の趣味も、ポピュラーなものだけでなく、少し趣味あるものを選びたいという転換期に入ってきていると感じた。

（高木委員）

観光戦略的には、このフェアを全国区・世界区にしたい。JF2000では日本全国から多くの来客があったが、その後の5年毎の花みどりフェアは島内メインの、地元のイベントになってきた。淡路島の現状は、宿泊者で言うと、首都圏の客が6.5％であり、有名観光地の中では日本最下位となっている。隣の鳴門市では27％もある。インバウンド客になると、2019年まで遡っても2％程度しかない。他の都市と比べても遅れている状況であるので、万博の年に開催するというところも含み、淡路島への来客のブースター機能を果たすような展開にしたい。

また、万博の開催期間には、淡路県民局と観光協会が中心となって、AWAJI島博という博覧会を開催する。メインは県が認定するフィールドパビリオンで、実際に島に来て伝統産業を体験していただくことを狙っている。こうした体験は、インバウンドの、特に富裕層の誘客には効果があると考えている。ただ、消費者から見た際には、同時期に同じようなイベントがあるとややこしいので、プロモーションや開催期間も含めて、花みどりフェアと一体感を持ってやっていきたい。

（中瀬委員長）

過去に東京で会議に参加した際、夕方から南あわじ市でも会議があった。メンバー3人のうち2人は新幹線だったため会議途中で会場を出たが、私は飛行機で徳島空港経由であったため、最後まで東京の会議に参加できた。徳島空港を使えばかなり時間は短縮できる。首都圏からの来島者を戦略的に増やすという点では、そういったことも考慮する必要がある。

（三井委員）

25年で状況が変化したということはその通りだが、メイン会場の公園を担う立場から言うと、チューリップで客を呼んでいるという部分はやはりあるので、それはそれで楽しんでもらうという部分の継続も必要かと思っている。これまでも大事だが、これからをどう生み出していくかという点で訴えかけられるものがあればよいかと考える。また、生物多様性という点が、SDGsという一言で伝わるかなという懸念がある。

（中瀬委員長）

ご指摘のとおり、SDGsをどう扱うかは難しい。広範な概念をどうこのフェアに持ち込むのかということをしっかり考える必要がある。

（田辺委員）

25年前に現在の状況は誰にも想像できなかった。地球で大きな問題が起こっている中、このフェアを、今後について人々に考えていただくきっかけとすればよいと考える。中瀬委員長の仰った生物多様性や地球温暖化を考えるといったこともあるが、三井委員の仰った花と緑が客を呼べるということもまた事実である。客を呼んで何を伝えるかということかが重要なのであり、決して反対のことではない。そうした大きな問題点に関して提言をしていくと同時に、身近な問題としてどのようにして花をもっと売れるようにするのか、あるいは、生産者が気づかなかったニーズは何なのかといった調査をしていくきっかけにする。そういうことで言えば、今までの委員の意見は全て同じ方向を向いていると思っている。

75万人という目標について、前回、前々回の来場者数は何人か。

（事務局）

前回は、春と秋の2回に分けて開催しており、またコロナ禍ということもありイレギュラーではあったが、GWを含んだ春期だけで約53万人となっている。前々回はGWを含んで約160万人だが、今回の開催期間を勘案すると約75万人程度となる。

（田辺委員）

資料4P「花と緑に関連するイベントに特化する」という点についてだが、少し広めた、人文科学的な内容は入れないということか。

（事務局）

淡路島は御食つ国ということで食の特産物も多いため、2020のフェアでは、秋期に、食を中心としたイベントも開催したという経緯がある。これを念頭に、今回はその食の部分を外して、花と緑に回帰していきたいと考えている。

（田辺委員）

御食つ国と並んで国生みの島ということもあるが、これは入れるのか。

（事務局）
サテライト会場でもそういったところは出てくると考えており、また、理念の中にも入れていく方向である。
（田辺委員）
「花と緑に特化」としてしまうと、そういったところを入れにくいように感じる。
（事務局）
表現を和らげる形に修正させていただく。
（田辺委員）
AWAJI島博との関連という点では、かなり密着した形でやった方がよいと思う。また、情報発信に関しては、淡路島民、兵庫県民、日本人、外国人、それぞれに対するものをしっかり分けて考える必要がある。
資料4Pの「地方回帰の流れ」は一般的な言葉として使用されていることかと思う。「地方」と対になる言葉は2つあり、1つは全国、1つは中央であるが、いずれにしても地方はマイナー側である。兵庫県では、政府の地方創生という言葉に対して、地域創生という言葉を使っており、そこに敬意を感じているところである。そういう意味では、ここでは地方という言葉ではなく、淡路島への流入といったような表現を使われたほうがよいかと考える。
（事務局）
地方回帰ではなく淡路回帰とすべきというご指摘はその通りである。近年、観光だけでなく、居住という点でも、淡路島のポテンシャルが見直されていることを踏まえてこの項目を立てている。一般論ではなく、淡路への回帰の流れということを明確にするようにしたい。
（中瀬委員長）
資料3Pに関連してこれまでの流れを振り返ると、2010ではメインの淡路会場が中心であったが、2015では全島の3会場になり、2020になるとコミュニティや集落にまで広がり地域住民が主体になってきた。このように地域密着型で動いてきたフェアの流れを工夫してまとめていただければと思う。また、淡路のブラタモリを見直していただき、ぜひこの背景の部分に使っていただければいいと思う。
今日の議論でも様々な課題が出たが、文化や芸術、暮らしと花みどりをどう一体化していくのかというところが淡路島の特徴になる。フィールドパビリオンという形でもよいので、しっかり考えていくことが必要である。淡路景観園芸学校の澤田先生が朝日新聞で淡路島の人々の暮らしや風習、伝統について連載しており、これを読めば、淡路島の人々がいかに緑と環境と密着して生きてきたかということが理解できるので、ぜひ参考にしていただきたい。
また、75万人という来場者数について、そろそろこういう数字を出すのはやめてはどうか。何人来たかではなく、満足度という指標のほうが重要だと考える。
近年、民間企業が30by30の取組みに参加しているので、そういったところもしっかりまとめていただきたい。生物多様性や環境、暮らしといった課題がある中で、これから私達がどんな方向を目指していくのかということを、次回までにまとめてほしい。

【検討議題4】（資料2/P8）

（三井委員）

JF2000の開催意義に「園芸造園産業の発展と国際的な振興をはかる」ことが挙げられていることを踏まえると、今回のフェアにも、造園業の振興のようなことが含まれていてもよいかと考える。また、地域の若者のアイデアを取り入れるという点では、万博と絡めるのであれば、島内や県内だけでなく、より広く外との交流という考え方を取り入れてもよいかと考える。

（中瀬委員長）

「自生種の活用」という文言が、とってつけたような感じがする。

（事務局）

自生種のついては、現在勉強しているところである。ニューヨークで自生種を素敵にデザインしているような例もあるが、今回のフェアで人を呼べるような形にできるかというとまだイメージができていないため、アイデアをいただきたいと考えている。

（中瀬委員長）

ネモフィラが有名な国営ひたち海浜公園ではJRを引き込んで駅まで造るという議論まであったように、綺麗な花で客を呼ぼうという動きは一定ある。他方、自生種は地味で、興味をもつ人も少ない。そこのバランスをどうするか。

（門野委員）

一般の方々には、地域の住民がどのように関わってきたのかということが知られていない。失敗例も含め、具体的にこれまでにどのような取組みがあり、いかに根付いているかということを示すことで、住民が参加して何ができるのかというある程度の方向性が見えてくるのではないかと思う。その検証も踏まえて、この資料に盛り込めば、より具体的な内容になるかと思う。

（田辺委員）

自生種の活用に関連して、鉢植えにしても面白くない勿忘草が売れているということは、いい植え方があるんだと思う。今までは活用されていなかった自生種でも、飾り方を変えればよく見えるというようなことがあるのではないか。チューリップを見に来た人に、そういったことに気づいてもらえれば、販売用の苗ができるかもしれない。

（高木委員）

花と緑をメインにやっていくということはその通りだと思うが、観光戦略目線では、あまりそこだけに囚われる必要はないと思っている。フィールドパビリオンは、万博までに50～100程度のラインナップにして、AWAJI島博のHPで予約できる形にしたいと考えている。AWAJI島博での体験はSDGsそのものなので、花と緑をメインにしつつも、AWAJI島博と一体でうまくPRすることによって、SDGsという考え方そのものがフェアに盛り込まれると考える。

（事務局）

これまでのフェアでは花と緑に関係ない賑やかしイベントのようなものも実施してきたが、今回はそうではなく、花と緑に力を入れたいという想いもあり、「花と緑に特化」という表現をしていたところである。表現は工夫していく。

（田辺委員）

花と緑だけにこだわらないのであれば、現在、世界中でブームになっている日本食について、御食つ国である淡路がその中心であるということを海外に発信してはどうか。また、日本文学に関心のある欧米の方々は、古事記をよく知っているので、古事記の舞台の中心が淡路であるという発信もできる。御食つ国も国生みの島も、日本遺産なので、日本人にもPRできる。

淡路を世界に発信するという意味では、先日、南あわじ市の阿万の風流大踊小踊が世界無形文化遺産に登録された。兵庫県民にも知られていないことだが、淡路島には世界遺産がある。また、この機会にうずしおが世界遺産になるようなエネルギーを蓄えていただきたい。

（中瀬委員長）

ここ数年で、淡路の市民参加のメンバーはすごく若返っている。阪神淡路大震災の直後に立ち上がった人々が歳をとってきて、バトンタッチして新しい組織が立ち上がってきている。そうした大きな転換期にさしかかったタイミングで今回のフェアが開催されるということを位置づけていただければと考えている。

【検討議題5、6】（資料2/P9～10）

（中瀬委員長）

クラウドファンディングをこのフェアでどう使うのか、慎重に議論してほしい。事務局が募集するのではなく、地域の方々が自分たちのイベントをうまく盛り上げるために募集するような、そういう工夫を事務局から提案していただくとよいのではないか。

（高木委員）

広報について、多くの単発イベントを並べてPRすると賑やかに見えるが、遠隔地や海外の方で、ピンポイントでその日に合わせて来る方はいない。遠隔の方向けの広報は、イベント一覧という形ではなく、やはり、とても綺麗な花畑というシンプルなアピールが分かりやすいと思う。

（中瀬委員長）

従来の旅行代理店の大人数を対象としたツアーもあるが、最近は、少人数に限定した趣味的なツアーもある。今回のフェアでも、花を目的として大勢の方に来てもらう必要がある一方で、そのノウハウや原点を見てもらうような二段構えの仕込みも必要だと考える。その際には、暮らしや歴史といった様々な味付けの仕方がある。

（田辺委員）

人数的には多くないと思うが、全国の農業高校の方々を優待して来てもらうようなこともよいかと考える。また、高齢者カレッジにも園芸コースがあるので、周辺府県のそういった

コースに来ているような方には重点的に呼びかけていただければと思う。

（中瀬委員長）

関西圏では産業高校が淘汰されている中、兵庫県は農業高校等でしっかり育成しているので、そういった意味でも大事にすれば喜ばれるかと思う。

【その他・全般】

（入谷委員）

会場について、過去の経緯はあると思うが、会場を分散した結果、行ってみたらあれ？というようなことが正直あるので、最後ということを考えると、発祥の地である淡路会場でしっかりしたものをやるべきではないかと思っている。食に関しては、AWAJI島博でしっかりやっていただければよいかと思う。

（事務局）

行ってがっかりということのないように、各地の方にも頑張っていただきながら進めていきたい。

（中瀬委員長）

事務局には、一度おのころクルーズを体験してほしい。淡路島の漁師がどれだけ丁寧に、親切にしてくれるか、これは体験しないと分からないので、ぜひ現場を見てきてほしい。

（田中委員）

先日、大学で、全国の高校生によるSDGsの企画コンテストの審査員をしたが、学生の考えることがとても面白かった。このフェアでも、学生達のアイデアが反映されるような機会があればよいと思っている。

海外の方に向けては、世界の国別のエリアがあれば、日本にいる外国人の方々も参加してくれるのではないか。そのエリアに合わせて、キッチンカー等でそれぞれの国の食を味わえるようなイベントができれば、無理をせずとも一回は興味を持って来てもらえるかと思う。また、淡路島も兵庫県なので、灘の酒を紹介するような、お酒ができるまでの流れが分かるような催しができないかと思っている。また、特に欧米の観光客向けには、純和風の日本庭園の作り方の講座や、日本庭園エリアの設置、動画での紹介等をすれば興味を持ってもらえると思う。

私は、映像で地域を盛り上げる事業に携わっているが、やはり音や匂いがなくても、状況を見ただけで行ってみたくなるような絵になる景色を作っていただきたいと思っている。後々、そこが何かのロケの舞台になるような形になればよい。

（堀内委員）

移住者は客観的に淡路島のいいところを見て移住してくるが、地元の方は、地元のいいところが当たり前になりすぎてわからないというところがある。

今回は地域住民主体の花と緑の取組みを後世に伝えるとか、育成という考え方が入っているので、暮らしという観点で言うと、島内の学生や子供達に伝えていくということも打ち出

していけばよいと思っている。

淡路島は花の島であるので、綺麗な花と緑を見てもらうということはもちろんだが、いろんな人に来てもらうという点では、食や、暮らしに絡めていくほうがよいかと思う。なんでも機械化されてきている中で、手作りで作る様子等を見てもらえれば、日本の若者や、外国の方にも響くのではないかと思う。

（中瀬委員長）

灘の酒を誰が作っているかというと、丹波の杜氏である。淡路の産物が成立しているのも、淡路や摂津だけでなく、丹波や但馬の人々との交流のもとで成立しているという歴史があるので、そういったことも見ていくと面白い話がある。

県立人と自然の博物館では、来館者のほとんどが、小中学校や幼稚園のリピーターである。今回のフェアは、日本全国から1回だけ来てもらうのか、周辺に住んでいる人にリピーターとして来てもらうのか、どっちを大事にするのかということは議論したい。その積み上げが75万人なのであればそれでよいが、私自身は、阪神や神戸、徳島からのリピーター、淡路を大事にしてくれるようなファンをどう増やすかということが大事かと思っている。博物館を30年やってきて感じていることである。

以上